



V

男声合唱組曲

「わがふるき日のうた」

I. 鶯のうへ
II. 湖 水
III. Enfance finie
(過ぎ去りし幼年時代)
IV. 木 兎
V. 郷 愁
VI. 鐘 鳴りぬ
VII. 雪 は ふる

作詩 三好 達治
作曲 多田 武彦
指揮 北村 協一

男声合唱組曲 わがふるき日のうた

作詩者 三好 達治



三好達治(1900~1964)詩人。大阪市に生まれる。達治は早くから萩原朔太郎に師事し、同人誌「青空」「椎の木」「詩と詩論」を経て、堀辰雄、丸山薫らと「四季」の同人となった。昭和5年に処女詩集「測量船」で伝統的、古典的叙情に根ざした都会的感覚と西欧象徴詩風の鋭い批評とによって、叙情詩の新分野を開き、詩壇での確固たる地位を確立した。そして「南窓集」(昭7)「閑花集」(昭9)などによって、自然な感情を実験的手法による四行の平易なことばでうたい、「感覚的映像の具体性の充実」を試みた。更に「艸千里」(昭14)以後は、文語的定型を守って、独自の古典的詩境を作り上げ、完成された古典美を示した。達治は、昭和期を代表する叙情詩人の一人であり、随筆・評論にも見るべきものを残した。

組曲「わがふるき日のうた」 多田 武彦

昨年11月22日、私も還暦を通り過ぎた。「思い出す歌はおしなべて、わが旧き日の歌」となる年令になったが、関西学院グリークラブの名演奏も、数限りなく聴かせてもらった。これらもみんな「ふるき日の良き歌」であった。

詩人三好達治先生の詩との出会いは、比較的早い。また「先生の生家が私の生家から2軒ほどのところにあった」と聞いて、余計に親近感を持った。したがって、処女作の「柳河風俗詩」や「富士山」を作曲した昭和30年前後に、三好先生の詩にも作曲しようとしたが、なかなかうまくまとまらない。当時25才前後の私には、無理だったのかもしれない。

その後20年ほど経って、私も45才になった頃(その二年前に「尾崎喜八の詩から」をもって作曲活動を再開しましたが)。ふと、三好先生の詩集を出して、読みなおしてみた。「海に寄せる歌」「わがふるき日のうた」「追憶の窓」「秋風裡」の四つの男声合唱組曲と、混声合唱組曲「季節のたより」を、たて続けに作曲したのは、この頃である。

三好達治先生の詩は、一見静かである。しかし、その落ち着いた表現の奥底に、限りなく力強い心の動きが見ら

れることが多い。作曲に際しては、この奥底の心の波動をしっかりと見定めておかないと、駄作が出来てしまう。

また三好先生の詩の流れのなかに、折々の変容がある。ひとつの詩の流れが、ひとつの表現パターンで続いていくとき、読む側が「この辺で、次の展開が欲しいな」と思う寸前で、新しい流れに切りかわる。またこの変容がみずみずしい。更にこの変容も、明瞭に描かれることもあれば、映画のオーバー・ラップ方式のように、ゆっくりと変化していくこともある。昔、恩師故清水脩先生に「歌曲を作曲するときは、詩の持っている音楽に、寄り添うように書け」と教えられたが、三好先生の場合は、詩の持つ音楽のほかに、この変り目の色彩感にも注意しなければいけないと思った。

#

第59回リサイタル、おめでとうございます。関西学院グリークラブとのお付き合いも、もう40年以上になりますが、永い年月、いつも感動的な合唱音楽を聴かせていただき、感謝しています。今回は、私の作品を採りあげていただき、厚く御礼申し上げます。

関西に生まれた詩人三好達治の世界を、永い年月育まれた伝統と表現の力で、見事に歌い綴られることでしよう。演奏会のご成功を祈ります。